

生きる機微 写し出したい

崇城大芸術学部教授で彫刻家の勝野眞言さん(65)は熊本市が、改組新第6回日展の彫刻部門で最高賞の文部科学大臣賞に選ばれた。日展の全5部門を通して最高賞受賞は県内初。勝野さんは「一つの節目。違った表現を始めるいい機会になる」と語る。

勝野さんは長野県南木曾町生まれ。武蔵野美術大学院修了後、美大の予備校で講師をする傍ら、公募展に出品し受賞を重ねた。2005年に日展展の西望賞と日展の会員賞を受賞し、06年に同大に着任した。10、11年には津奈木町での住民参画型プロジェクトの講

日展の彫刻部門で最高賞受賞



崇城大芸術学部 勝野眞言教授

師役を務め、地元の陶土を使って小中学生らと作品を作った。

受賞作「瀬」(高さ150cm)は強化プラスチック(FRP)を素材にした作

品。2年前、授業で学生らに指導しながら手掛けた。

「言葉の説明や結果だけでなく、制作の裏側も見てほしくて。誰よりも対象に迫ろうとしてきた。追求して

きたことに一つの答えを出せたと思う」。「横たわる体軀の重心の表現が見事」と高く評価された。

人体を見ていると、その

曲線が山の尾根や稜線など郷里の風景の奥行きと重なるという。現在に至るまでの制作の道のりも平坦ではなく、長い間、自身の感性が信じられず迷い苦しんだ。抜け出したのは39歳の頃。幼い娘が頬づえをついて座る姿を作り上げた

時、「(対象の)その人の存在が感じられればいいんだ」と自分の感覚に確信や希望が持てた。

彫刻の魅力は「作品が自分と同じ空間に存在すること。そこに自分の思いを寄せられる」と話す。現在、天草陶石を使った作品を作っている。「その白い色に、人間の美しさや生きる機微を写し出したい」と話す。

(魚住有佳)

改組新第6回日展の彫刻部門で文部科学大臣賞を受賞した崇城大芸術学部の勝野眞言教授
＝熊本市西区



勝野眞言さんの受賞作「瀬」(公益社団法人日展提供)